城西国際大学紀要　第31巻　第２号　2023年３月　117-132

〈研究・調査報告〉

2022年度新設科目「統合日本語」の授業内容を振り返る
―CLILとして、講義コマとして―

髙　柳　真　理

【要旨】

2022年度はクォーター制が導入された。それに伴って学部日本語科目も大きく改訂され、新しい共通基盤科目として「統合日本語Ⅰ」「統合日本語Ⅱ」が設置された。この統合日本語科目では、JIU日本語教員で開発された教科書が使われている。本稿では、この教科書でどのようにCLILとして授業が展開できるのか検討し、実際に行った授業では、どうであったかを振り返った。また、今年度より日本語科目は実習コマから講義コマになったが、統合日本語では、授業がどのように組み立てられ、実施されたのかを示した。それから、実際に行われた授業内容が、カリキュラム概要の内容に沿ったものであったかどうか考察した。最後に、新設科目「統合日本語」の第一歩であった今年度を振り返ることにより、よりよい統合日本語科目の発展のために今後検証すべき内容を述べた。

キーワード：CLIL、4C、低次（LOTS）・高次（HOTS）思考、自律学習、学習コミュニティー

１．はじめに

2022年度から日本語カリキュラムは大きく改訂され、新しい科目が新設された。新設科目に「統合日本語Ⅰ」「統合日本語Ⅱ」がある。この科目は、「内容言語統合型学習（Content and Language Integrated Learning)」の考えに基づいて日本語を学ぶことを目指している。そこで、本稿は、使用する教科書にCLILとしての特徴である4Cがどのように組み込まれているのか、実際に行った授業が内容統合型学習となったのかを検証し、講義コマとしてどのように授業が展開されたかを報告する。今回の検証をスタートとし、今後は別の角度からの検証を行うことにより、この新設科目の「統合日本語」の授業の質を上げていくことを目指す。

２．科目「統合日本語」設置の目的

2022年度の新しいカリキュラムでは各科目の概要が示された。「統合日本語」科目の概要は次のように言及されている。

カリキュラム概要（語学教育センター日本語プログラム科目概要より）

「この授業では、内容言語統合型学習（CLIL）の4つのC（内容、言語知識・言語使用、思考、協学）の方法を用います。オーセンティックな教材を用いて、学習者は能動的に授業に参加し、協働学習を通じて、発話力や表現力を養います。内容と言語を学び、それらを自分の言葉でまとめたり、意見を述べたりできるようにします。そして、クリティカルに考えられるようにペアワークやグループワークをしながら双方向の理解を深め、思考力を養います。最後は発表したり議論したりして学びの成果をまとめます。授業外では、毎回、4時間程度の課題と復習が必要です。」

この統合日本語の目的は、概要にある通り「日本語を学びながら、考える力を身に付ける」ことである。この目的を満たすためにこの科目では、城西国際大学の日本語科目担当の日本語教員が開発した教科書が使われている。(『知る・考える・伝える日本語』原やす江編著　学校法人城西大学出版会）この教科書は、大学生として必要な教養や知識を幅広く身につけてほしいという考えが構想にあり、その考えから、各課のテーマに、総合大学である城西国際大学の各学部に関連ある内容を取り上げることになった。今回授業を担当するにあたって、「統合日本語」の目的として2本の柱を考えた。一つの柱を、日本語を学びながら思考力を養成することとした。これは、CLILの考えに基づくいろいろな学習活動を通して、低次思考から高次思考までの学習をすることで達成ができる。もう一つを、大学生としての教養、知識を身に付けることとした。これは、教科書の各テーマを学ぶことであるが、学部ごとの関連テーマがあるため、学生が自分の学部関連のテーマ時に、他学部の学生に自分の専門的な知識をシェアすることによって、達成できると考えた。この2つの柱を支えるものとして、授業時は、クラスメイトとの学習コミュニティーとして学習していくことを重視した。

３．統合日本語科目と教科書

３．１　統合日本語について

CLILの教育法の基本には、移民を多く受け入れたヨーロッパの言語政策の「複言語・複文化主義」がある。この複言語主義について、奥野三菜子（奥野、2016：12）は「複言語主義とは複数の言語が相互に関連し合って補完的に存在しているという考え方です。一方、多言語主義は複数の言語がそれぞれ独立して存在しているという考え方です。」と述べている。従来の個人の中に存在する母語、外国語が独立していると考える「多言語主義」とは違い、個人がもつすべての言語能力を関連付けて理解するものである。たとえば、日本語学習者の日本語能力だけを切り離して考えるのではなく、学習者の母語や他の言語のすべてを含めたものを言語能力としてとらえる。個人がその言語能力を駆使して、目的を果たすために必要な言語活動を行うことを重視している。この考えに立ったCLILは、Content and Language Integrated Learningの頭文字をとったもので、その意味が表すように内容と言語を統合した学習法、教育法である。内容を学びながら、語学学習もするという学習法である。内容を学ぶという点から見ると、内

容を重視した教育法として、CBI（Content-based Instruction）がある。CLILとCBIの大きな違いとしてCLILの特徴である4つのCが挙げられる。

4つのCとは、「Content（内容）、Communication（言語知識・言語使用）、Cognition（思考）、Community/Culture（協学・異文化理解）という4つの概念」（奥野、2018：8）である。この4つのCの関係について、渡部は「『4つのC』を融合させることで最大の学習効果を引き出すCLILの場合、推進力となるのはContent（内容）であり、それにCommunication（言語）、Cognition（思考）、Community（協学）を絡ませていく。」と述べている。（渡部、2011：17）Content（内容）は、学習者が学ぶテーマの内容である。「統合日本語Ⅰ」「統合日本語Ⅱ」では、各学部と関連したテーマを学んだ。これらのテーマが推進力となり他3つのCを巻き込んで学習を進めていくことになる。Communication（言語知識・言語使用）は、奥野（2018）によれば、言語知識の学習、言語スキルの学習、学習を通した言語使用の3つがある。新しい語彙や重要表現や文法の学習は「言語知識の学習」、発表の仕方、レポートの書き方、討論の仕方などは「言語スキルの学習」、そして、この二つを組み合わせて実際に学ぶことが「学習を通した言語使用」である。Cognition（思考）は、思考することであるが、笹島（2020）のBloomのTaxonomyを使った「CLILにおけるブルームの教育目標の分類」は、各学習活動がどのレベルの思考を行っているものか、低次思考力LOTS（Lower-Order Thinking Skills）から高次思考力HOTS（Higher-Order Thinking Skills）の段階に分類することができる。記憶することから、理解すること、分析をしたり、創造的に何か作ったりするなど浅い学びから最終的には創造へと深い学びを目指すことができる。最後に、Community/Culture（協学・異文化理解）であるが、池田真（池田、2016：14）はCultureの概念に対して「多様な他者と課題を達成する協働的実行力（Culture）－省略―「Culture=協学」を使用することにした」としている。本稿でも、異文化理解を促進させるものという意味を含有しつつ、CLILで多く用いられるペアーワークやグループワークなど共に学び合う協学をCommunity/Cultureとしている。以上の4つのCがCLILの大きな特徴である。では、「統合日本語Ⅰ」「統合日本語Ⅱ」で使用している教科書には、どのようにこの4つのCが組み込まれているのか、組み込めるのかを見るために、使用教科書について検討したい。

３．２　使用テキストについて

「統合日本語Ⅰ＆Ⅱ」で使用のテキストは、原やす江教員を中心としてJIUの日本語教員によって作成された。前述の通りこの教科書を作成するにあたって、留学生に大学生としての知識と教養を身に付けてほしいという考えがあった。そして、留学生は総合大学としての城西国際大学で学ぶことから、本大学の学部からテーマを選び日本語でその内容を学び、日本語で自分の意見を表現できることを目指そうということが決められた。それによって選ばれたテーマを各課のタイトルとそれに関連する学部で次に示す。「広告」（メディア学部）、「環境社会」（環境社会学部――2022年3月末に閉部）、「経営」（経営情報学部）、「世界遺産」「おもてなし」（観光学部）、「日本文化」「異文化の中の私」（人文学部）、「生命を操る」（薬学部・看護学部）、

「社会福祉」（福祉総合学部）である。この中で、「広告」「おもてなし」「環境社会」「科学のゆくえ」（該当学部なし）「経営」は、『知る・考える・伝える日本語』原やす江編著として、城西大学出版から2020年3月に出版され、「統合日本語Ⅰ」のテキストとして使用されている。他の「世界遺産」「日本文化」「異文化の中の私」「生命を操る」「社会福祉」は、「統合日本語Ⅱ」のテキストとしてPDFで配布され使用されている。

３．３　４つのＣ

このテキストでは、書名の通り「知る」「考える」そして、「伝える」学習活動ができるようになっている。ここで、CLILの特徴である4つのCが各課にどのように組み込まれているのかを表で示す。表は、4つのCに基づいて分類したものである。（表内のHOTSは高次の思考技能を、LOTSは低次の思考技能を表す。分類は、笹島茂（笹島、2020：25）による。）

各課の4つのC　　表1-a　「統合日本語Ⅰ」

	統合日本語Ⅰ　第1課	統合日本語Ⅰ　第2課	統合日本語Ⅰ　第3課
テーマ	広告 心を動かす言葉	「おもてなし」 相手に気を遣う態度や言葉	環境社会 環境問題のメカニズム
Content （内容）	広告コピーの目的、伝え方、テクニックを知る。	日本の「おもてなし」の文化を知る。	環境問題の種類やメカニズムについて知る。
Communication （言語）	・広告やキャッチコピーに関わる言葉、表現を知る。 ・広告、コピーに関する読み物を読む。 ・文章を書く基本を学ぶ。 （文体、段落、引用方法など） ・広告のコピーを紹介する。 ・メールでの連絡文を書く。	・「おもてなし」、サービスに関わる言葉、表現を知る。 ・日本のサービスについての読み物を読む。 ・敬語や言いさし表現を知る。 ・自国の「おもてなし」について他国と比較した内容も入れて説明文を書く。	・環境問題やその理論に関わる言葉、表現を知る。 ・寓話や数値データー資料を読み、抽象的な内容を理解する。 ・インタビューする。 ・インタビュー内容をレポートにまとめる。 ・発表をする。 ・川柳を作る。
Cognition （思考）	・自分の経験から広告について考える。（HOTS/LOTS） ・広告の与える影響を考える。（HOTS/LOTS） ・心を動かす言葉の表現とその理由を考える。（HOTS/LOTS） ・実際の広告のコピーを分析し、その効果を理解し、PPTを作成し発表伝える。（HOTS）	・自分の受けたサービスの経験からサービスとは何か考える。（HOTS/LOTS） ・日本の「おもてなし」と自国の「おもてなし」を比較する。（HOTS）	・自分の経験から考える。（HOTS/LOTS） ・具体的な例から抽象的な内容、理論を理解する。（LOTS） ・理解した理論や分類から、実際の具体的な事例を見つける。（HOTS） ・生じている問題に対する解決策を考える。（HOTS） ・自分で集めた情報（インタビューなど）を人に伝えられるようにまとめる。（HOTS）

Community （協学）	・ペアーやグループで話し合う。 ・発表をしてコメントする／もらう。 ・広告について意見交換をする。	・ペアーやグループで話し合う。 ・自国の「おもてなし」の考えを伝えあう。	・ペアーやグループで話し合う。 ・環境問題やそのメカニズムを自分に関わりのある問題としてとらえる。 ・グループで外部の人にインタビューをする。

（2022年10月15日開催日本語CLIL教育学会第５回発表[1]時作成表をもとに筆者作成）

表１- b　「統合日本語Ⅰ」

	統合日本語Ⅰ　第４課	統合日本語Ⅰ　第５課
テーマ	科学のゆくえ 科学技術の発展がもたらすもの	経営 グローバル化の先駆け
Content （内容）	科学技術の発展とその影響の正負の面を知る。	企業の経営やグローバル化に関する方針、課題を知る。
Communication （言語）	・核開発／核兵器、AIに関連する言葉、表現を知る。 ・科学の発展に関する読み物を読む。 ・根拠を示し、意見文を書く。	・経営、グローバル化に関する言葉、表現を知る。 ・経営についての読み物、資料を理解する。 ・発表する。
Cognition （思考）	・科学の発展によりもたらされる良い面、悪い面を理解する。（LOTS） ・物事を複数の視点から内容を分析し、分かりやすく説明する。（HOTS） ・科学技術の発展で生じた問題と自らの関わりを考える。その解決策の提案、課題を示す。（HOTS）	・中小企業の課題、グローバル化の課題など理解する。（LOTS） ・興味ある会社を調べ、特徴などをまとめる。（HOTS）
Community （協学）	・ペアーやグループで話し合う。 ・意見文を読み合い、コメントをする。	・ペアーやグループで話し合う。 ・興味のある会社について概要を発表し合う。

（日本語CLIL教育学会第５回発表時作成表をもとに筆者作成）

表２- a　「統合日本語Ⅱ」

	統合日本語Ⅱ　第１課	統合日本語Ⅱ　第２課	統合日本語Ⅱ　第３課
テーマ	世界遺産	日本の文化	異文化の中でのアイデンティティー
Content （内容）	世界遺産の種類と目的を知る。世界遺産の功罪を知る。	日本人のコミュニケーションスタイル、日本文化の構造、日本の文化論について知る。	異文化経験について、さまざまな考え方や捉え方について知る。異文化に接した時の４つのカテゴリーの分類を知る。カルチャーショックの５つの段階を知る。

[1] 2022年10月15日に開催された「日本CLIL教育学会第５回大会」発表タイトル「新しい学部科目『統合日本語』の試み―学部横断的に選ばれた各テーマに４Cを取り入れた授業デザインとその実践を振り返る―」

Communication （言語）	・世界遺産、観光に関する言葉、表現を知る。 ・世界遺産についての読み物を読んで理解する。 ・講義などの主張を理解する（聴解）。 ・譲歩の表現、具体例を出して意見を述べる。 ・発表をする。	・コミュニケーションや文化に関する言葉、表現を知る。 ・日本のコミュニケーションスタイルについての読み物を理解する。 ・中心段落と指示段落を見極めて内容を理解する。 ・意見の食い違いなどを表す表現を知り、理解、使ってみる。 ・文章を書く。	・異文化に関する言葉、表現を知る。 ・異文化経験をした人の読み物を読み、内容を理解する。 ・意味推測の読み方を学ぶ ・経験談を聞いて理解する。 ・自分の異文化体験とカルチャーショックの文章を書く。
Cognition （思考）	・世界遺産、その歴史と功罪を理解する。（LOTS） ・興味のある世界遺産の現状を調べ、良い影響、悪い影響をまとめ、今後の解決策を考える。（HOTS）	・日本人のコミュニケーションスタイルについて経験や新しく学んだ知識から、自分の意見をまとめる。（HOTS/LOTS） ・日本語の表現に表れる日本人の考え方について考える。（HOTS） ・自国の言葉の表現に表れている考え方について考え、まとめる。（HOTS） ・自国と他国のコミュニケーションの違いを比較する。（HOTS）	・異文化経験者の内容を理解し、自分の留学を考える。（４つのカテゴリー分類から自分の態度を分析する。）（HOTS） ・カルチャーショックの５つの段階と自分の留学とを照らし合わせて、自分の留学について分析する。（HOTS）
Community （協学）	・ペアーやグループで話し合う。 ・世界遺産について発表し合い、意見交換をする。 ・クラスメイトの発表に対して評価を行う。 ・発表後にアンケートをし、行きたい世界遺産のトップ７を決める。	・ペアーやグループで話し合う。 ・他国の言葉の表現に表れる考え方をクラスメイトから知る、伝える。	・ペアーやグループで話し合う。 ・クラスメイトのドラフトを読み合い、コメント、アドバイスをする。

（日本語CLIL教育学会第５回発表時作成表をもとに筆者作成）

表 2 - b 「統合日本語Ⅱ」

	統合日本語Ⅱ　第４課	統合日本語Ⅱ　第５課
テーマ	生命を操る	福祉は誰のため？
Content （内容）	遺伝子検査や生殖医療技術の発展とそれに付随する倫理的問題について知る。	福祉の理念、福祉制度の実際、障害者が必要とする支援について知る。
Communication （言語）	・現在の遺伝子や生殖医療技術に関する言葉、表現を知る。 ・医療技術と倫理的問題に書かれた読み物を理解する。 ・反対意見表明、言い差し、倒置など会話で使われる言い方を理解し、使ってみる。 ・ディスカッション（討論）時の表現とその方法を学ぶ。 ・小論文を書く。	・福祉制度や福祉や教育における福祉に関する言葉、表現を知る。 ・障害者に関する統計から、また、福祉制度を受ける人、福祉に関わる人が書いた読み物を読んで、内容を理解する。 ・「最良の福祉とは」と言うテーマで小論文を書く。
Cognition （思考）	・遺伝子について理解する。（LOTS） ・現在の遺伝子解明の現状やその利用、生殖医療技術とその現状を理解する。（LOTS） ・医療倫理に関して、自分の興味のある内容を調べる。（LOTS） ・どこまで生命を操ることが許されるのか、自分の興味のある内容の視点から意見交換をする。（HOTS） ・遺伝子検査の利用などについて、問題点を理解し、ディスカッションで自分の意見を述べる。（HOTS） ・遺伝子利用について自分が選んだ視点から文章にまとめる。（HOTS）	・福祉の理念と現状を理解する。（LOTS） ・違う立場の視点から見える福祉はどのようなものか理解する。（LOTS） ・現状の福祉制度の問題や、福祉を受ける人の立場など理解した上で、今後のあるべき福祉について考え、意見を伝え、意見交換する。（HOTS）
Community （協学）	・ペアーやグループで話し合う、ディスカッションをする。 ・クラスメイトにコメントを書く、コメントを読む。	・ペアーやグループで話し合う、ディスカッションをする。 ・クラスメイトのドラフトを読んで、コメント、アドバイスをする。

（日本語CLIL教育学会第５回発表時作成表をもとに筆者作成）

３．４　４Ｃと目的とした２つの柱

この教科書ではこのように４つのＣを組み込んで学習を進めることができる。今回の授業実施にあたって２つの柱の一つは、思考力の養成があった。Cognition（思考）の項目では、ブルームの教育目標の分類の低次の思考から高次低次の中間思考そして最終的には成果物作成と高次の思考の学習活動が含まれているため、この目的に即した学習活動が行われたと教員の立場からは言えるのではないだろうか。また、もう一つの柱である大学生として必要な教養や知識を身に付けるという点でも、学生は取り上げたテーマを中心として、それに関連する情報を自ら集め知識を広げていったことが見られた。

４．実際の授業の流れ

４．１　授業の基本的な考え

2022年度から従来の実習コマであった語学授業は、講義コマに変更された。学生は授業前後、2時間の予習と2時間の復習、計4時間の家庭学習を行うことになった。そこで、この授業の基本的な考えは、「授業は授業でしかできないことをする」とした。授業は、学生同士のインターアクションを行う場であり、学生が個人でできることは個人で行うという考えである。自律的な学習の重視、そして、反転授業的要素を取り入れ、予習で学習した内容を授業でクラスメイトとの協働学習活動によって確認、理解を深める。そして、LMSのManabaを使って復習を行う。Manabaでの復習を確認することで教師は学習者個々の理解度を把握し、必要に応じて個人的またはクラス全体のフィードバックを行うことを実施した。クラスは学習コミュニティーとなり、教師は円滑な学生の学習活動ができるためにサポートをする役であり、主役は学生一人一人という考えで行った。学生は、2時間の予習でテーマ導入部分を学習し、日本語の語彙、表現、そしてテーマの内容について学習する。それから、自分の意見を考えてまとめておくというように学習が進められた。それでは、ここで、具体的に1つの課を取り上げて、どのように授業が展開されたか見てみたい。

４．２　授業展開　（「統合日本語Ⅱ」第４課 生命を操る）

第1回授業　テーマを知る（INPUT）

【予習】

まず、予習では学習者は音声からテーマのインプットがある。第4課の生命を操るでは、遺伝子検査に対する5人の考えを音声で聞いて理解し、その理解した内容を伝えられるようにしておくことが課題である。内容としては、治療できない病気もあるので遺伝子検査をしたくないという意見、母、叔母が乳がんで亡くなっているので検査をしたいという意見、出生前診断結果で出産を選ばなかった例から複雑さを指摘する意見、遺伝子検査結果の情報の悪用などの危険性の意見、遺伝子検査結果がもたらす弊害の意見など5人の視点を聞く。それらの視点に対して、自分はどう思うのか、自分の考えをまとめて、クラスで意見交換できるように準備をしておく。

もう一つの予習課題は、「救世主兄弟」と言う映画についてのナレーションを聞く。それは、病気になった子どもを助けるために両親は現在の医療技術を利用して遺伝的に子どもの血液型に適合していた受精卵を選び第二子を産み、第一子を助けたという話である。この内容の理解後、それぞれ3人（両親、第一子、第二子）の立場に立って、自分ならどう思うかを考え伝えられるようにしておく。

【授業】

5人の意見の内容の理解を確認しグループで自分たちの意見を述べ合う。また、「救世主兄弟」の内容の理解の確認後にグループで自分たちの意見を述べ合う。話しあいの後、各グルー

プで意見をまとめてクラスで共有する。

【復習】

復習では、再度聴解部分を聞き、授業内容の復習をしてから、Manabaで理解度チェックを行う。クラスメイトと意見交換した後の自分の意見も文章として書く。教員は各人の理解度チェックの出来栄えで個人の理解の程度を把握し、必要であれば個人的に、またはクラス全体にフィードバックをする。

※この聴解では、遺伝子検査や救世主兄弟など実際にある内容であるが、スクリプトは書き下ろしたものである。

第2回　文章を読む（新な情報のINPUT）

【予習】

教科書にある遺伝子に関する知識を学び、必要であれば自分で調べる。読解本文に出てくる語彙・表現の予習、学習すべき文法項目の「文法の解説と練習」を学習する。そして、短文作成等の練習部分を行いManabaで提出し教師の添削とフィードバックを受ける。（教師は、間違えが多かったもの、クラスで説明をしたほうがいいものをまとめて、授業時に全体にフィードバックする。）それから、読解（小松美奈子「生殖医療」笠松幸一・和田和行編著『21世紀の倫理』第2章 生命倫理　八千代出版所収）自分で読んで理解する。

【授業】

遺伝子に関する知識の内容をチェックする。今回は生物学が得意だった学生がクラスで内容について説明をした。その後に、読解の読みをグループで行う。クループで読み合わせをしながら、理解した内容を確認しあい、分からないところを質問し合う。グループで理解できなかったことは、教師に聞く。学生から受けた質問に対して答えた後、教師は、クラス全体で共有したほうがいい内容や難しい点は、全体に伝える。内容を理解するためのシートを完成させる。最後にはクラス全体で理解したことを確かめる。

【復習】

授業で読んだ読解文を再度読んで復習をする。その後に内容理解度チェック（内容が書かれている段落、正否を問う）を行う。言葉の理解度チェック（読み物で使用され、覚えておいてほしい語彙、表現の意味確認、3択問）を行う。文法理解度チェック（「文法の解説と練習」で学んだ文法の問題、マッチング）を行う。ここでは、日本語の文法と語彙の整理を復習として行う。

第3回　話を聞く（新な情報のINPUT）

【予習】

モノローグの聴解を聞いて理解しておく。この課では、遺伝子情報分析を個人に提供してきた会社が生殖医療の新しいサービスを始める内容についての説明を聞く。その後、会話の聴解を聞く。この会話は、モノローグで取り扱われた内容についてそれぞれの考えを話している二

人の会話である。聴解内容理解をし、自分の意見が説明できるようにしておく。

【授業】

聞いて理解した内容の確認をグループで行い、その後全体で確認する。聴解内容の確認後、聴解（聞く技術）と会話（話す技術）のポイントを学ぶ。（この技術は、各課で内容が違うため、学習者は毎回新しい「聞く」「話す」の技術を習得していくことになる。）この課では、「これまで」と「これから」でまとめるものと反対意見の表明の表現、言い差し表現、倒置表現が学習内容としてある。そして、倒置表現の練習をおこなった。この第3回目の授業では、この課で学んだ日本語学習のまとめの部分が来る。他に、生教材としてYOUTUBEでDNA検査した人のビデオをINPUTとして行った。

【復習】

学習した聴解部分の復習を行い、内容理解チェック（聞く技術、話す技術について、また聴解の内容について）の問題をManabaで行う。教師はこの結果から個人の理解度の把握と必要であれば個人、クラス全体でのフィードバックを行う。（聞く技術＆話す技術）自分が興味を持った内容について調べる。

第4回　今までの情報を整理、分析して自分の考えを表す。（OUTPUT）
クラスメイトの意見を聞く（INPUT）再度熟考し、文章で表す。（OUTPUT）

【予習】

ディスカッションのため4つのテーマについて自分の考えをまとめておく。必要ならば情報も集めておく。

【授業】

ディスカッション「生殖医療について」そのスキャフォールディングとして「討論のための表現」がある。4つのテーマについてグループでディスカッションを行う。その後、Padletに付箋のようにそれぞれディスカッション後の最終意見をポストイットする。内容の広がりとしては、遺伝子組み換え作物についてのディスカッションをしたグループもあったため、クラスで発表してもらい全体で共有した。最後に、小論文の基本モデル（意見文）の例の学習を行った。

【復習】

論拠に基づく意見、必要な出典を明記し、「はじめに」「本論」「おわりに」の構成がある小論文を書いて提出する。教師からフィードバックを受ける。内容全般についてクラスで伝える。

学生は学習の振り返りをManabaのアンケート機能を使って行う。（各課終了後に実施）

このような流れで各課の学習が進められた。この授業の進め方は、この教科書の編著である原（原、2022：64）が「この学習デザインでは、まず文章を読んだり話を聞いたりして内容を「知り」（日本語で何と言うかも一緒に知り）、その知った知識をもとに課題について自分なりに「考え」、その考えを文章に書いたり口頭発表したりしてみんなに「伝え」るという学習ス

テップをとっている。」と述べているように進められた。

４．３　LMS、ICTが可能にしたこと

授業の基本を「授業でしかできないことをする授業」として学生の協働学習活動を行ったが、それを可能にしたものとしてLMSやICTがある。LMSのManabaは学生が予習して理解してきたことを授業でクラスメイトと共に確認し、その後の復習と振り返りの時のツールとして使用した。学生が予習時に自分がまとめた考えを授業時にクラスメイトと意見交換する。そして、他者の考えを聞いた後の自分の考えをManabaでの振り返り時に文章化する、教員は内容理解の質問の解答から学生一人一人の理解度の把握ができた。また、教員は予習時にまとめた個々の学生の意見と授業終了後の復習時にまとめた学生の文章内容を比較することにより、個々の学生がクラスメイトと意見交換しどのように考えが変わったのか、内容を深めたのかも理解することができた。そして、学生の文字化した最終意見は、Manabaの掲示板に貼り出すことによって、クラス全体でシェアすることができた。

インターネット上の学習ツールは、コロナ禍により使用が開始されたが、対面授業に移行した後も学生の学習を効果的にする道具として、教員が個々の学生の理解度の把握を明瞭にし、一人ひとりの学生に対しても、全体に対してもフィードバックを効果的にすることを可能にした。（Manabaだけでなく、Padletというアプリを使って付箋のように自分の意見を貼っていくものも使用した。これは、学生がグループで話し合った後に最終的な自分の考えを付箋のように貼ってクラス全体でシェアした。賛成意見、反対意見などグルーピングして分かりやすく示すのに役立った。）

４．４　学生の学習活動

学生がどのように学習活動を行ったか、CLILの４つのCの点から述べるために図を示す。

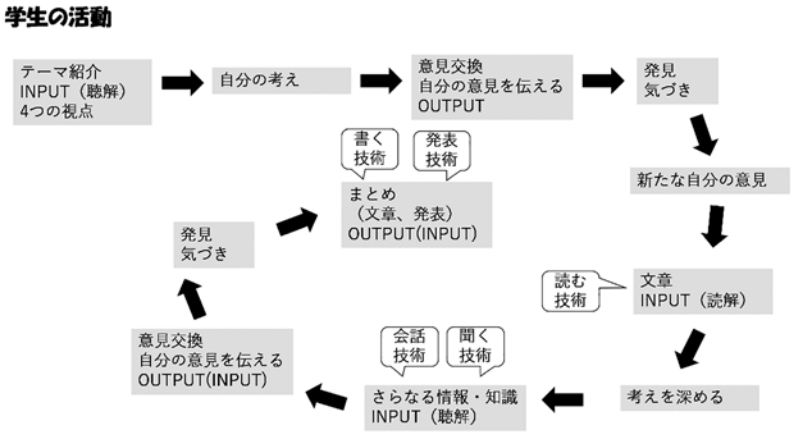

図１

学生の学習活動に基づき日本語CLIL教育学会第５回発表時筆者作成

まず、4CのContent（内容）であるテーマのインプットから自分の考えをまとめ、授業に参加して自分の考えをクラスメイトとシェアする（自分の考えのOUTPUT、クラスメイトの考えのINPUT）それから、復習時に学習内容の復習と確認と同時にManaba入力で自分の意見を文章にする。そして、次の予習では、文章（読解）のための予習として語彙・表現・文法を学び、文章を読んでおく。そして、授業では、クラスメイトと読み合わせをしながら質問し合い、教え合い考えを深めていく。その後の復習では、Manabaで読解内容の質問に答える。これによって、教師は個々の学生の文章の理解度を把握することができる。その後、学生は予習として聴解を聞き、新たな情報や知識を知る（INPUT）。新しい情報を得た内容についての自分の意見をまとめて次の授業に臨む。授業ではその内容について理解度の確認をし、自分の意見をクラスメイトに伝える意見交換を行う。この間の学習活動を、Cognition（思考）の点から見ると、低次思考（LOTS）、高次低次の中間思考（HOTS/LOTS）、高次思考（HOTS）が行われる。そして、最終的には高次思考の創造、例えば文章に書いて表すなどの学習活動を行う。このように学生は、一つのテーマについてINPUTとOUTPUTを繰り返す中で自分の考えを深めていくことができる。Communication（言語知識・言語使用）の点から見ると、語彙・表現、文法の言語知識は、必要に応じて学習される。言語技術は、吹き出して示した時に言語学習として明示的スキャフォールディングがテキストにある。4つのCのCommunity/Culture（協学・異文化理解）では、授業での学習がそれを実体験する学習コミュニティーになっている。

以上、「統合日本語Ⅰ」「統合日本語Ⅱ」の授業についてその内容を述べた。

５.「統合日本語」の授業を振り返って

５.１　CLILが与える空間（他者との意見交換の場、学習コミュニティーの場）

「統合日本語Ⅱ」終了後に学生に感想を聞いてみた。もっとも多かった良かった評価の意見は、他の学生の意見を知ったことが挙げられた。この点については、他の授業、特に大学の授業では頻繁に経験することではないかと思うが、これは、一つCLIL授業の特徴ではないかと思う。2022年10月15日の日本CLIL教育学会第5回大会の発表の中にも、5年間同じクラスで学習した高等専門学校の学生の英語のCLIL授業に対する意見として他の学生の意見が多く聞けたという内容があった。日常多くの時間を共に過ごしている学生たちであっても、CLILの授業において、他者との意見交換をよい感想として挙げていた。今回の授業では、「授業は授業でしかできないことをする」を基本に多くの協働作業を行った授業時間は、学習のコミュニティーとして有効に使われたのではないか。出身国が違う（中国人、韓国人、ベトナム人）異文化間、また薬学、看護学部いないが、専攻専門が違う学生の集まりのコミュニティーとしてテーマごとに教え合える学びの場となったのではないか。

５．２　CLILの柔軟性

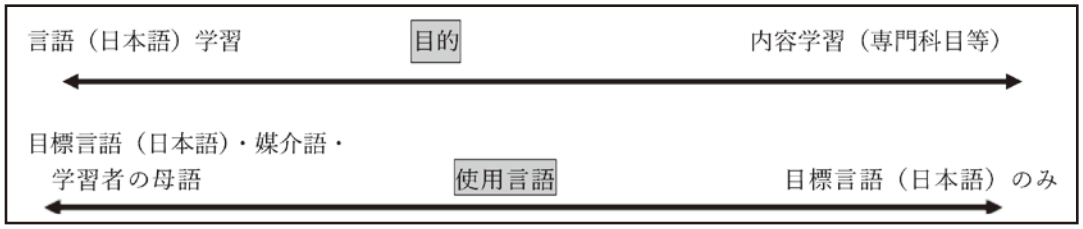

図２　CLILのバリエーション

奥野由紀子著『日本語教師のためのCLIL入門』(2018,p43）より必要な部分を図にした。

ここに奥野（奥野、2018：43）の図（「図１　CLILのバリエーション」）の一部を示す。

この図によれば、CLILの考えとして、ソフトCLILからハードCLILへのバリエーションがある。日本語学習の割合が多ければ、ソフトCLILの方向へ、内容学習の比重が多ければ、ハードCLILの方向へ向かう。これは、学習者の言語レベルに応じて、日本語学習に重点を置くか、内容学習に比重を置くかをニーズに応じて変化させられることを示している。

日本語授業の履修クラスに関しては、学生は学期開始前のプレイスメントテストでN1とN2に判定され、それぞれのレベルで履修するクラスが決まっている。N1レベルの学生が対象のクラスでは、日本語語学学習にかける時間はあまり必要ではなかったため、多くの時間を内容学習、学習者間の意見交換などに費やされた。これに対して、N2レベルの学生の履修クラス時は、日本語学習への比重が大きくなった。このように、学生の学習の必要性に応じてソフトとハードのどちらの方向にも比重を置けるのが、今回使用した教科書である。この教科書には、各課に「読む技術」「聞く技術」「話す技術」「書く技術」と4つの語学技術を身に付けるためのポイント学習ができるための説明と練習がある。日本語学習理解のための足場作りが明示されているので、学生のレベルに合わせた語学学習が言語技術を学びながら、内容のテーマについて学ぶことが並行してできた。

また、もう一つ「言語使用」のバリエーションから見ると、学習言語のみを使用するのではなく、他の媒介語の使用も可能である。N2レベルのクラスでは、媒体語を日本語だけとせず、グループの読解活動では、日本語で表すことがまだ難しい学生は、同じ母語学生のグループ内で母語での読解理解活動を前半で行った。後半では、日本語を媒体語として行うようなグループとして活動した。これは、「複言語・文化主義」がCLILにはあることを示している。目標を達成するために個々の持っているすべての言語能力を使って目標を達成するという考えからきている。この時、最初から日本語だけでグループ活動ができると思われた学習者には意図的に日本語しか使えないグループメンバーにした。このグループメンバー決定という点では、学生の心理的な面の配慮が必要なものであるため、よりよい学習環境作りを目指して今後効果的なグループ構成についての教員の技術向上が求められる。この点については、熟達度の違うペア、グループや母語の違う／同じペア、グループなど学習者の協働作業の効率化という点で、

検討される必要がある。

５．３　「総合日本語」との違い

学生の意見の中に、4 技能をいろいろ織り交ぜた学習ができたことが良かったという感想があった。総合日本語でも同じような 4 技能の日本語教育が行われる。では、総合日本語と統合日本語では何が違うのか。統合日本語では最終的に成果物を作成することにより、高い思考技術が要求されるとともに、クラスメイトの成果物をシェアして評価できるという点が大きく違うのではないかと「日本語Ｉ」を担当し比較して思う。また、学生の学習活動にあるように、INPUT、OUTPUT を繰り返しながら、テーマについて深く掘り下げていくことも特徴ではないかと思う。

５．４　学習教材とオーセンティシティー

現在使用している教科書では、読解学習資料が生教材である。聴解のスクリプトは実際に起こったことを基に書かれたスクリプト等で、生教材ではない。授業時に、学生はインターネットで自分が必要な情報を得る、教師が、テーマに関連する生教材を新たに紹介、学生が学習するなど行われたが、このオーセンティシティーに関しては、今後も検討していく必要があると感じた。この場合に、オーセンティシティーは何かを考える必要がある。J-CLIL 第 5 回大会シンポジウムで、「CLIL における Authenticity とは」と言うテーマで議論がされた。その中で、「一見すると authentic でない学習内容や学習素材からも、工夫次第では authentic になりうるし、また学習内容や学習素材が authentic であるか否は、生徒の内面に基準があるのではないか、と考えている」と白井竜馬は述べている。（白井・笹島・松島、2023）また、同ニューズレターで笹島茂は「素材が authentic であれば良い、と私は思わない。授業全体が authentic であることが重要なのだ」と述べている。第 4 課「生命を操る」では、読解以外は現在生じている問題を取り扱ってはいるが、生教材ではなかった。しかし、学生が、そのテーマについて自ら情報をインターネットなどで探し知識を蓄え、意見交換や討論をした学習過程があり、今後ますます進展していくであろう遺伝子操作に自分はどのように向き合っていくのか、倫理的にどうあるべきかなど真剣にクラスメイトと学習をしていた姿を想い出すと、そこには、authenticity が大いにあったと考えるが、今後、CLIL における authenticity、学生にとっての authentic な授業とは何かについても検討していきたい。

６．おわりに

今回は、第 1 回目の試みということで、学習内容について「統合日本語」科目としての内容に焦点を当てて振り返りをした。では、実際に学生は何を学んでいるのか、学修効果はあるのか、という点は今回の報告では見ることができなかった。今後、成果を客観的に測定する評価

の質的可視化、学生の主観的な評価の量的可視化の検証が求められる。その検証を今後行い、目的とした「大学生として必要な教養や知識を身に付ける」「日本語を学びながら、自ら考える力を養う」という2つの大きな柱が達成できる授業となっているのかどうか、検証したい。また、5.4で述べたオーセンティシティーの視点も今後検討していきたいものである。そして、教育の質を高めるために、円滑な学生の活動ができるためのサポート役である教師の技術の向上、例えば効果的なグループ分け、学生が安心感をもって活動できる環境作りなども高めていきたい。

【参考文献】

池田真・渡部良典・和泉伸一共編（2016）『CLIL内容言語統合型学習―上智大学外国語教育の新たなる挑戦―第3巻授業と教材』上智大学出版

奥村三菜子・櫻井直子・鈴木裕子編（2016）『日本語教師のためのCEFR』くろしお出版

奥野由紀子編著／小林明子・佐藤玲子・元田静・渡部倫子著（2018）『日本語教師のためのCLIL入門』凡人社

笹島茂著（2020）『教育としてのCLIL』三修社

白井龍馬・笹島茂・松島恒熙（2023）「CLILにおけるAuthenticityとは―第5回大会シンポジウムでの議論―」*J-CLIL Newsletter, 10, 4-8.*

原やす江（2022）「『知る・考える・伝える』授業デザインと学習者の受け止め」『JIU日本語教育実践報告』城西国際大学日本語教育担当部局

渡部良典・池田真・和泉伸一共著（2011）『CLIL内容言語統合型学習―上智大学外国語教育の新たなる挑戦―第1巻原理と方法』上智大学出版

A Reflection on *TOUGOU NIHONGO*, a New Japanese Course

Mari Takayanagi

Abstract

The academic year 2022 started with a quarter system. And the new Japanese curriculum also started as well. One of the new Japanese subjects is CLIL, *Tougou Nihongo*. This paper examines how this course can be described as CILL textbook use, developed by some JIU Japanese instructors, and what was done that year. Finally, it discusses how this course could achieve the purpose mentioned in the new Japanese curriculum. Examining these issues can lead to the discovery of other things which should be invested, such as authentic materials to the students and classroom engagement. Also, the quality of teaching should be examined to enhance the qualities of this course ultimately.

Keywords: CLIL, 4C, HOTS&LOTS, autonomous learning, learning community